

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
亀山市	神辺小学校	130人
亀山市	亀山中学校	560人
亀山市	中部中学校	555人

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

子どもたちの学力が向上することは、自己肯定感やチャレンジする力を高め、将来の夢を実現するための可能性や選択肢の拡大につながる。子どもたちが学ぶ楽しさ・わかる喜びを実感しながら、自らの希望と未来を支える学力を身に付けられるよう、平成24年度から学校・家庭・地域が一体となって「みえの学力向上県民運動」（H28～R1：セカンドステージ）に取り組んできた。

ファーストステージ（H24～H27）では、学校での組織的な授業改善や、家庭での生活習慣・学習習慣・読書習慣の確立、地域への積極的な子どもへの関わり等の取組を促進した。

セカンドステージ（H28～R1）では、「学校では授業改善等の取組を深め、家庭・地域では、生活習慣・学習習慣・読書習慣の確立等の取組を広げ、家庭の状況により、対応が難しい問題については、地域による学習支援や居場所づくりなどにより、地域で支える」という方向性を基本とし、取組を進めている。

（1）学校における授業改善等の取組の「深まり」に向けて

これまで子どもたち一人ひとりに確かな学力を育むために、全国学力・学習状況調査や、みえスタディ・チェック等を活用して課題を把握するとともに、子どもたちがどれだけできるようになったのかを確認し、改善につなげる取組を進めてきた。

<取組内容>

① 教育支援事務所による市町、学校の状況に即したオーダーメイドの支援

小規模な市町教育委員会が所管する学校に対して、きめ細かな支援を行うため、平成28年4月に3つの教育支援事務所を設置し、校長との懇談や授業参観等における指導・助言をとおして、学校の状況に応じたオーダーメイドの支援を進めてきている。

② 市町教育委員会訪問、学校訪問による継続的な支援

県教育委員会の学力向上の施策が浸透し、持続可能な具体の取組になっていくよう、市町教育委員会訪問や市町教育委員会と連携した学校訪問をとおして、各学校の状況に応じた具体的取組の支援を平成 26 年度から行っている。

この取組をとおして、学力向上の取組に対する意識や取組の実施率は高まってきたが、その取組を進めるなかで、子どもたちの学習内容の理解・定着状況の確認が不十分であった。こうした課題をふまえ、平成 30 年度下半期からの学校訪問においては、学習内容の理解・定着状況を確認するための取組が進められるよう、学校の課題、具体的取組内容、取組スケジュールを校長、市町教育委員会、県教育委員会が共有するとともに、取組による子どもたちの変容について確認し、指導・助言を行っている。

③ 効果的な少人数指導に向けた取組

子どもたち一人ひとりにきめ細かな指導を行うため、平成 28 年度から少人数指導について対象学年・教科や指導形態（ティーム・ティーチング又は習熟度別少人数指導）を指定した実践推進校において、継続的な少人数指導の研究、検証を行っている。平成 29、30 年度末には、その検証結果をもとに、より効果が見られた取組実践事例としてガイドブック vol. 1、vol. 2 に取りまとめ、各学校へ周知し、効果的な少人数指導とりわけ算数・数学における習熟度別少人数指導の取組を促進している。

④ 学習内容の理解・定着を図る取組

ア みえスタディ・チェック

子どもたちの学習内容の定着状況を把握し、各学校における授業改善、個に応じた指導の充実等を促進するため、平成 26 年度から本県独自の課題を作成し「みえスタディ・チェック」を実施している。平成 30 年度の 1 月実施では、4 月実施からの定着状況の確認や経年での比較検証ができるよう、これまで出題した問題等を活用し、同一、同趣旨の問題で作成し実施している。

イ ワークシート集（学-Viva!!セット）、わかる・できる育成カリキュラム（「割合編」「図形編」「読む力・伝える力編」）

子どもたちの課題に応じたワークシート集（学-Viva!!セット）を作成し、平成 26 年度から小中学校に提供している。平成 30 年度からは、基礎からの標準的な問題で構成したワークシート集（学-Viva!!セット）を全小中学校に提供している。

また、経年的な課題の改善に向け、平成 30 年度には算数の「割合」「図形」について、令和元年度には「読む力・伝える力」について、子どもたちのつまずきの状況、指導のポイント、たしかめプリント等で構成した指導資料を作成し、全小学校教員及び中学校に提供し活用を促進している。

ウ 数学的思考力育成に向けた教材の提供

小学校低学年段階から数学的思考力を育成するため、平成 29 年 9 月に民間企業と包括協定を結び、希望する小学校、特別支援学校等に PC 版学習教材を提供し効果的な活用を進めている。

(2) 家庭・地域における取組の「広がり」に向けて

<取組内容>

① 生活習慣・学習習慣・読書習慣の確立等の取組

ア みえの親スマイルワークの取組

平成 29 年度から、三重県 PTA 安全互助会や子ども・福祉部と連携して、「みえの親スマイルワーク」の進行役となるスマイルリーダー養成講座を年 1 回、開催している。

イ 生活習慣・読書習慣チェックシートの取組

子どもたちの生活習慣の確立に向けて、県内の幼稚園、保育所、認定こども園、小中学校において、生活習慣・読書習慣チェックシートの取組を進めている。

ウ 読書に関する取組

発達段階に応じた読書活動の推進、読書活動を通じた言語能力の育成に向け、さまざまな読書活動の取組（朝の連続小説、ポップづくり等）を小中学校に提案するとともに、各学校の状況に応じた学校図書館を活用した調べ学習や読み聞かせの取組を行っている。

また、大人と子どもがともに本に親しむ「家読（うちどく）」のチラシの配布等、家庭での取組を啓発している。

② 地域による学習支援や居場所づくりの取組

ア 三重県型コミュニティ・スクール

地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校づくり」を推進し、公立小中学校にコミュニティ・スクールを中心とする学校経営・学校運営の仕組みの導入を図っている。コミュニティ・スクールを導入していない市町に対しても、訪問や情報提供を行い、令和元年度は 20 市町 182 校で設置されている（平成 28 年度 16 市町 108 校）。

イ 学校支援地域本部（地域未来塾を含む）

大学生や教員 OB、民間教育事業者、NPO 等の地域住民の協力により、地域と学校が連携・協働して活動を行っている。学校支援地域本部を設置している学校数は平成 28 年度から 27 校増加し 261 校となっている。

また、経済的な理由や家庭の事情により、家庭での学習が困難であったり、学習習慣が十分に身に付いていなかったりする児童生徒を対象に、地域住民等の協力によって児童生徒の学習習慣の確立と学力の向上を図るための地域未来塾の取組等を支援している。地域未来塾は、平成 28 年度から 17 校増加し、令和元年度は 10 市町 51 校で取組まれている。

ウ 多様な主体と連携したキャリア教育の推進

子どもたちが地域の産業や企業を知り、将来、地域社会で活躍する意欲を持てるようにするために、地元企業等での就業体験、地域の職業人による出前授業、行政や大学等と連携した地域の課題解決や商品開発等、地域の特色に応じた取組を行っている。

2. 推進地区における取組

亀山市として、子どもたちの学力の状況をふまえ、以下2点の研究課題を設定し、取組を進める。

- ・確認プリントの活用や放課後等における補充的な学習の実施による児童生徒一人ひとりの状況に応じたきめ細かな指導のあり方についての研究
- ・全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェック等の結果をふまえ、課題の改善に向けた授業改善や効果的な習熟度別少人数指導についての研究

研究課題に対する亀山市の具体的な取組は、以下の7点である。

- ・亀山市学力向上推進計画の周知と実施の徹底
- ・亀山市学力向上推進計画検討会議の開催
- ・亀山市小中研修担当者会の開催
- ・学力向上研修会の開催
- ・学びの定着に向けた検証と学び直しの実践の支援
- ・亀山市学習支援事業 学習教室の実施
- ・協力校に対する支援

3. 協力校における取組

(1) 神辺小学校

- ① 全国学力・学習状況調査等の結果をふまえた授業改善
 - ・授業スタイルの確立など、児童にとって学習の見通しが持てる授業実践
 - ・算数科における習熟度別少人数指導
 - ・プログラミング的思考を取り入れた授業づくり
- ② 「算数カルテ」を活用した、つまずきのある児童の学力の状況把握とその状況に応じた基礎的・基本的な知識及び技能の定着
 - ・「算数カルテ」を活用した補充的な学習の実践
 - ・朝のスキルアップタイムの学習
- ③ 保護者と連携した家庭学習の取組

(2) 亀山中学校

- ① 授業改善
 - ・説明型授業から課題解決型授業への転換
 - ・数学科における習熟度別少人数指導の実践
- ② 基礎学力の定着を目指した補充的な学習の取組
 - ・学習ボランティアを活用した自主的な学習を促進する「学びたいむ」と補充的な学習を行う「亀中スタ Day」の実施
- ③ 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組
 - ・家庭学習での自主学習の定着を図るための「スタ Day ノート」の取組
 - ・PTA と連携した「ケータイ預ける Day」の実施

(3) 中部中学校

- ① 「MATH CHALLENGE TIME」(授業での短時間繰り返し学習)の取組
- ② 授業改善
 - ・「振り返る活動」における書く活動を重視した授業づくり
 - ・数学科における習熟度別少人数指導の実践
- ③ 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組
 - ・生徒会を中心とした「ノースマホデー」の実施

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 神辺小学校

- ① 全国学力・学習状況調査等の結果をふまえた授業改善
 - ・「習熟度やT・Tの算数の授業はわかる」に対する肯定的回答が83%
 - ・低学年の「数と計算」領域の学習におけるプログラミング的思考を取り入れた指導による学習意欲等の向上
- ② 「算数カルテ」を活用した、つまずきのある児童の学力の状況把握とその状況に応じた基礎的・基本的な知識及び技能の定着
 - ・みえスタディ・チェックの記述式問題の正答率が向上
 - ・指導方法や指導内容の焦点化
(習熟確認テスト→算数カルテ→補充のための再授業→プリントで補充)
- ③ 保護者と連携した家庭学習の取組
 - ・平日1時間以上学習する児童の増加
 - ・図書館貸し出し冊数の増加

(2) 亀山中学校

- ① 授業改善
 - ・生徒アンケート「授業への理解度」が88.5%
 - ・みえスタディ・チェックの県の平均正答率との差が6.3ポイント改善
- ② 基礎学力の定着を目指した補充的な学習の取組
 - ・「亀中スタ Day」を11回実施し、延べ242人が参加
 - ・「学びたいむ」を26回実施し、延べ592人が参加
- ③ 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組
 - ・生徒アンケート「家庭で毎日勉強していますか」が71%

(3) 中部中学校

- ① 「MATH CHALLENGE TIME」(授業での短時間繰り返し学習)の取組
 - ・全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの平均正答率の改善
- ② 授業改善
 - ・生徒アンケート「習熟度別少人数授業が有効である」の肯定的回答が84.2%
- ③ 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組
 - ・学校評価アンケート「家庭で毎日勉強しているか」が63.4%

2. 実践研究全体の成果

全国学力・学習状況調査、県独自の学力調査「みえスタディ・チェック」（小4・5、中1・2対象、4月・1月の年2回実施）及び県独自の学力向上等に係る質問紙調査（学校を対象として年度末に実施）で検証を行う。

(1) 学校における授業改善の取組の「深まり」について

児童生徒質問紙調査では、「最後まで解答を書こうと努力している」「授業の内容がよくわかる」等の質問に肯定的に回答している子どもの割合が増えていることから、子どもたちの「わかった」が「やる気」を生み、最後まで粘り強く取り組む姿につながっている。

このことは、各学校において学習指導要領の趣旨をふまえた授業改善の取組や子ども一人ひとりの状況に応じたきめ細かな指導を進めてきたことによるものと考えている。

(2) 家庭・地域における取組の「広がり」について

平日1時間以上学習している割合は、小中学生ともに増加傾向にある。また、家庭・地域との関わりにおいても地域行事に参加していると肯定的に回答した割合は小中学生ともに増加傾向にあり、全国平均を上回る状況が続いている。

加えて、学校が、家庭や地域との連携・協働しながらよりよい環境づくりを進めるためのコミュニティ・スクールの導入や学校支援地域本部（地域未来塾を含む）の設置も増加傾向にある。

これらは、学校・家庭・地域が一体となって子どもたちの学びと育ちを支える体制が整いつつあるものと考えている。

3. 取組の成果の普及

(1) 合同成果発表会の開催

・令和元年度「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究」成果発表会において、当事業の推進地区亀山市及び協力校亀山市立神辺小学校が取組を発表し、普及を図った。

(2) 取組資料の配付

・本研究の実践事例等をまとめた冊子を作成し、県内公立小中学校及び関係機関等へ配付し、取組成果を普及する。

○ 今後の課題

1. 課題

(1) 学校の取組

校長のリーダーシップのもと、全校体制で「学習の理解・定着」を図る取組が年間を通じて計画的に進められている学校では、その多くで改善が見られる。一方、取組が進められているものの、年間の改善サイクルが確立していなかったり、一部の学年のみの取組にとどまっていたりする学校では、改善が進みにくい状況にある。

(2) 文章を読む力・伝える力の育成

経年的な課題である文章を正しく読み、書かれている内容を理解し、イメージする力や、自分の考えを書くことなどについては、改善が図られていない状況が見られる。

(3) 中学校英語

聞いたり読んだりして把握した内容について自分の考えを書く力等を育むため、内容の理解だけにとどまらず、内容に対する考えを英語で話したり書いたりできるようにする、英語によるコミュニケーション力を付ける指導が重要となってくる。

(4) 生活習慣・学習習慣・読書習慣について

「生活習慣・読書習慣チェックシート」の活用率は年々向上しているが、平日の学習時間や読書習慣には、依然として、課題が見られる。今後も、学校・家庭・地域が一体となった取組を推進する必要がある。

① 生活習慣の確立に向けて

- ・ゲームやスマートフォンの使用時間については、「3時間以上使用している（平日）」と回答している割合が全国平均を上回る状況が続いている。
- ・「スマートフォン等の使い方について、家の人と約束をしたことを守っていますか」との質問の、小学生の肯定的な回答割合は、増加傾向にあるが、全国平均を下回る状況が続いている。また、中学生は全国平均を上回る状況が続いているが、平成29年度は平成24年度、25年度に比べて肯定的な回答割合は低い状況である。

② 学習習慣の確立に向けて

- ・「学習習慣」（平日1時間以上学習している子どもの割合）については、本県の状況として改善が図られているが、依然として、小中学生ともに全国平均を下回る状況である。
- ・「家で、学校の授業を復習している」との質問の肯定的な回答割合は、小中学生ともに全国平均を下回る状況が続いている。家庭学習においても、学習内容の定着を図る取組を進めていく必要がある。

③ 読書習慣の確立に向けて

- ・「10分以上読書をしている（平日）」と回答している割合が小中学生ともに全国平均を下回り、中学生は本年度、最も低い状況である。合わせて、「読書を全くしない（平日）」と回答している割合は、小中学生ともに、全国平均より高い状況が続いている。特に、中学生の不読率は、全国差で比べると、本年度が最も高い状況である。

④ 家の人との対話

- ・「家の人と学校での出来事について話をする」との質問に、中学生の肯定的な回答割合は増加傾向にありますが、小中学生ともに全国平均を下回る状況が続いている。

(5) 地域による学習支援や居場所づくりについて

- ・地域による学習支援や居場所づくりに向けた取組について、さらに市町に働きかけていく必要がある。また、学校支援地域本部・地域未来塾においても、設置校は増加傾向にあるが、学校と地域が効果的に連携・協働するための仕組みを拡充していく必要がある。
- ・子どもの職業観や地域理解、地域への参画意識の醸成を図ることができているが、今後は、各学校で子どもたちが学校での学習と自分の将来との関係に意義を見出して学ぶ意欲を高めるとともに、子どもの発達段階や地域の実態に応じた系統的なキャリア教育を推進していく必要がある。

2. 今後の取組の方向性

これまでの取組の成果と課題をふまえ、「みえの学力向上県民運動」については、これまでの理念、取組の視点を基本的に引継ぎ、学校・家庭・地域が一体となった取組がさらに「広がり」、「定着」するよう、下記の方向性を基本としながら、引き続き取組を進める。

- ・学校では、授業改善や学習内容の理解・定着に向けた取組が、どの学校においても持続性のある取組となるよう「定着」を図るとともに、家庭・地域との連携・協働による取組を推進する。
- ・家庭・地域では、対話等子どもとのかかわりを大切にする取組や生活習慣・学習習慣・読書習慣の確立に向けた取組を広げる。
- ・家庭の状況により、対応が難しい問題については、地域による学習支援・居場所づくりなどにより、地域で支える取組を広げる。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

推進地区名	亀山市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

平成 30 年度全国学力・学習状況調査及びみえスタディ・チェックの結果から、亀山市においては、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に課題が見られた。特に中学校では数学においてその傾向が顕著であった。

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査及びみえスタディ・チェックの結果では、若干の改善が見られた内容、領域もあるが、依然として、小学校算数の「量と測定」等の領域、中学校数学「数と式」等の領域において、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に課題がある。また、小学校算数・中学校数学において、事象を読み取ることや、事柄が成り立つ理由を説明したり記述したりすることに課題が見られた。このことをふまえ、以下の研究課題を設定し、取組を進めた。

- 確認プリント（算数・数学）の活用や放課後等における補充的な学習の実施による児童生徒一人ひとりの状況に応じたきめ細かな指導のあり方についての研究
- 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェック等の結果をふまえ、課題の改善に向けた授業改善や効果的な習熟度別少人数指導についての研究

2. 研究課題への取組状況

本市における、研究課題に対する具体的な取組は、以下の 7 点である。

(1) 亀山市学力向上推進計画の周知と実施の徹底

- ・ 4月に、亀山市学力向上推進計画（平成 29 年 4 月改訂）を市内全教員へ配付し、取組の確認を行った。①授業での「振り返る活動」の充実 ②国語科スキル学習の実施 ③家庭学習の充実において、亀山市の弱みを解消し、ステップアップする取組を進めた。また、これらの取組の検証として、年 3 回全教員に対して「書く力」の育成を軸とする学力向上の取組にかかる教員アンケートを実施した。

(2) 亀山市学力向上推進計画検討会議の開催

- ・ 次期推進計画（令和 2 年 4 月改訂）の実施に向け、現行の推進計画の改訂作業を進めてきた。校長会代表、教職員代表、市内指導教諭、中学校研修主任、指導主事を委員とし、三重県教育委員会事務局学力向上推進プロジェクトチーム指導主事をアドバイザーとして招聘し、学力向上推進計画検討会議を開催している。亀山市の子どもたちの経年的な学力の状況や生活の

状況、各校で実施されている授業改善や補足的な学習の取組について状況を把握・分析し、今後の学力向上に向け、市の取組内容について検討を行ってきた。

(3) 亀山市小中研修担当者会の開催

- ・令和元年度から、市教育委員会主催の亀山市小中研修担当者会を年6回開催した。学力向上に関わる課題に対する具体的方策、成果を上げている市内の学校の取組を還流し、実践につなげる場を設定した。

(4) 学力向上研修会の開催

- ・市教育委員会主催の学力向上研修会を2回開催し、学識経験豊かな講師を招聘し、主体的・対話的で深い学びをふまえた授業改善について研修を深めた。

(5) 学びの定着に向けた検証と学び直しの実践の支援

- ・全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックの検証をふまえた学び直しとして、「三重の学 - Viva!! セット」「授業改善サイクル支援ネットワークシート」などのツールを活用した取組を実施している。

(6) 亀山市学習支援事業 学習教室の実施

- ・家庭生活が困窮していたり、家庭での学習環境が厳しかったりする生徒の学習習慣・生活習慣の改善や基礎的・基本的な知識及び技能の定着、生徒の意思に沿った進学を支援している。教員免許所有者（OBを含む）や大学生を含む社会人がグループを構成し、毎週土曜日16時～17時30分まで各中学校区に学習教室（各校区1教室）を開催している。

(7) 協力校に対する支援

- ・教育支援グループグループリーダー、指導主事、教育研究グループ指導主事が授業参観を行い、全国学力・学習状況調査等の結果をふまえた、授業改善等のあり方等について指導を行った。

3. 実践研究の成果の把握・検証

【協力校における学力状況、成果の把握・検証】

(1) 神辺小学校

① 全国学力・学習状況調査結果から

平成30年度全国学力・学習状況調査の各教科の平均正答率が全国平均を下回った要因の1つとして、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が不十分であることが考えられる。神辺小学校では、算数科における習熟度別少人数指導、児童一人ひとりのつまずきを支援する補足的な学習を実施してきた。

② みえスタディ・チェック結果から

平成31年4月と、令和2年1月に実施したみえスタディ・チェックの第5学年算数の結果では、学校の平均正答率は18.8ポイント上昇した。また、県の平均正答率との差も、4月では-4.0ポイントであったものが、+5.1ポイントに改善した。正答数の中央値は、4月に6であったものが1月には9.5となった。

③ 取組の成果

児童のつまずきを丁寧に支援する神辺小学校の取組の成果は、みえスタディ・チェックに表れている。例えば、4月実施のみえスタディ・チェック1(3)の問題と1月実施のみえスタディ・チェック1(2)の問題はともに、小数の除法についての理解を問う類題であるが、1

月実施は4月実施より23.7ポイント改善が図られた。

このように、神辺小学校の取組の成果が少しずつ表れていると考えられる。取組を支えているのは現場の教職員の児童一人ひとりの状況に応じたきめ細かな指導や管理職のリーダーシップがあったことはもちろんであるが、地域の学習支援ボランティアによる補足的な学習等の支援も挙げられる。こうした取組は、市内の他の学校にもさらに広げていく必要があると考えている。



<地域ボランティアが入ったの補充学習>

(2) 亀山中学校

① 全国学力・学習状況調査結果から

全国学力・学習状況調査において、数学の平均正答率は、平成30年度に比べると平成31年度は全国の平均正答率との差が縮まり改善が見られたが、依然として、「数と式」「関数」の領域における基礎的・基本的な知識及び技能に課題が見られた。また、記述式の問題の無解答率が高い傾向にあった。そのため、第2学年数学の授業において1クラスを2コースに分ける習熟度別指導を実施した。特に基礎的・基本的な内容の定着を重視するコースでは、生徒の人数を少なくして、生徒一人ひとりの状況に応じたきめ細かな指導がいきわたるようにした。また、もう一方のコースでは、生徒同士の関わり合いを大切に授業を展開した。

1学期当初、指導主事の訪問の際、生徒の発言の言葉(数学的な用語)の使い方にあいまいな所が目立ったため、教師が聞き直しをするよう確認し、授業を進めるように指導・助言した。授業での子どもの様子は、1学期から2学期に向け、生徒の集中力の高まりを感じられるようになってきた。

② みえスタディ・チェック結果から

平成31年4月と、令和2年1月に実施したみえスタディ・チェックの第2学年数学では、学校の平均正答率は10.3ポイント上昇した。また、県の平均正答率との差も、4月では-2.4ポイントであったものが、+3.9ポイントに改善した。正答数の中央値は、4月に7であったものが1月には11となった。

問題別にみると、「数と式」の同様の問題において1月実施は、4月実施より14.3ポイント改善が図られた。また、「関数」の同様の問題においても14.8ポイント改善が図られた。このように亀山中学校では、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が少しずつ図られていると考えられる。

(3) 中部中学校

① 全国学力・学習状況調査結果から

全国学力・学習状況調査において、数学の平均正答率は、平成30年度に比べると平成31年度は全国の平均正答率との差が縮まり改善が見られたが、依然として、「数と式」「関数」の領域における基礎的・基本的な知識及び技能に課題が見られた。

② 数学科の取組

中部中学校では、第2学年数学の授業において、2クラスを基礎・標準・発展の3コースに分ける習熟度別少人数指導を実施してきた。基礎コースでは、他コースより生徒数を少なく

し、一人ひとりの生徒と教師が関わる時間を確保する工夫をしていた。指導主事が訪問した際には、特に基礎コースにおいて、丁寧に指導しようとするあまり、教師の説明する時間や、板書が多くなることで、子どもが考えたり、自力で問題を解いたりすることが十分にできていない点についての改善を指導・助言した。

また、数学における学校独自の取組として、短時間の補充プリント学習「MATH CHALLENGE TIME」の取組を実施してきた。昨年度は、朝の会の10分間の時間であったが、今年度は数学の授業の最初の5分～10分の時間を活用して数学の復習プリントの取組を実施してきた。

平成31年4月と、令和2年1月に実施したみえスタディ・チェックの第2学年数学の結果では、学校の平均正答率は8.4ポイント上昇し、県の平均正答率との差も、1月実施は4月実施より4.4ポイント改善が図られた。正答数の中央値は、4月に7であったものが1月には9となった。

問題別に見てみると、「数と式」の同様の問題において4月の正答率が73.1%であったものが1月には、83.8%に、また、「関数」の同様の問題においても、4月の正答率が32.3%であったものが1月には40.0%と改善した。このように中部中学校においても、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が少しずつ図られていると考えられる。

【推進地域（亀山市）における学力状況、成果の把握・検証】

推進地域（亀山市）の平成31年4月と、令和2年1月に実施した、みえスタディ・チェックの小学校算数の結果では、協力校の取組、改善もあり、小学校第5学年では、市の平均正答率は14.0ポイント上昇している。また、県の平均正答率との差も、4月では-3.3ポイントであったものが、+1.0ポイントまで改善している。中学校第2学年では、市の平均正答率は9.2ポイント上昇している。また、県の平均正答率との差も、4月では-3.3ポイントであったものが、+1.9ポイントまで改善した。

4. 今後の課題

1月実施のみえスタディ・チェックでは協力校3校及び推進地域（亀山市）において、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が少しずつ図られた。一方で記述式の問題の無解答率が依然として高く、正答率にも課題が見られる。平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査でも明らかになっていた課題である「事象を読み取ること」や「事柄が成り立つ理由を説明したり記述したりすること」については、十分な改善が見られない状況にある。

今年度改訂される亀山市学力向上推進計画では、これらの課題に向けて、全教科・領域において、「書く力」・「読む力・読みとる力」の育成を柱とする取組の充実を図っていく。これまでの基礎的・基本的な知識及び技能の定着の取組と合わせて、市内全校で取り組んでいきたい。

また、市内では、全国学力・学習状況調査の学校質問紙の結果から、小中学校の連携の取組の弱さが明らかになっている。今後は、小学校・中学校が互いに、より積極的に授業参観を行い、子どもたちの学力・学習状況に関する情報交換を行うとともに、市教育委員会も支援を行い、算数科・数学科の授業改善をさらに進めていきたいと考えている。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

協力校名	三重県亀山市立神辺小学校
------	--------------

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 当初の課題

- (1) 全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果から、継続して学力に課題がある。
 - ・国語科では記述式問題（条件に応じて、字数制限、要約）に課題がある。
 - ・算数科では、式や値について理由を挙げて説明する記述式問題に課題がある。
- (2) 算数科の基礎的・基本的な知識及び技能の定着に課題がある。
 - ・習熟確認テストの結果から、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に課題のある単元が明らかになった。
- (3) 基本的な生活習慣の定着に課題がある。
 - ・SNSやゲーム、テレビなどの視聴時間が長く、家庭での学習が十分でない児童がいる。

2. 協力校として実施した取組内容

- (1) 全国学力・学習状況調査等の結果をふまえた授業改善
 - ① 授業スタイルの確立など、児童にとって学習の見通しが持てる授業実践
 - ・「めあて」の提示から「振り返る活動」までの授業スタイルの確立
 - ・「めあて」と正対した「振り返り」の記述
 - ・指導と評価の一体化
 - ② 算数科における習熟度別少人数指導
 - ・第5学年算数科における習熟度別少人数指導の実施
 - ・学習内容や児童の発達段階、習熟の程度等に応じて、より効果があがる指導形態（チーム
 - ・ティーチング、習熟度別少人数指導）を選択し、少人数指導を展開
 - ③ プログラミング的思考を取り入れた授業づくり
 - ・課題解決の方法を順序化、見える化し、論理的な思考力・判断力・表現力の伸長を図るため、課題解決の方法や順序を説明する活動や協働して課題を解決する活動を意図的に導入
- (2) つまずきのある児童の学力の状況把握とその状況に応じた基礎的・基本的な知識及び技能の定着
 - ① 「算数カルテ」を活用した補充的な学習の実践
 - ・既習事項に係る理解・定着状況を把握するための「習熟確認テスト」を実施
 - ・児童一人ひとりの「算数カルテ」の作成

・児童のつまづきの多い単元について再授業・補充的な学習の実施（毎週金曜日の低学年6時間目・高学年7時間目）

② 朝のスキルアップタイムの学習（スパイラルな学習）

・国語科の言語事項にかかる繰り返し学習の実施（毎週水曜日朝の学習）

・市教育委員会作成の「かめやまっ子チャレンジ」や学校独自の「漢字チャレンジ」などを使用

(3) 保護者と連携した家庭学習の取組

① 「家庭学習の手引き」にて家庭学習の手順の周知

② 「学校だより」にて学習状況の情報提供と家庭学習の啓発

③ 「チャレンジワークシート（県教育委員会作成ワークシート）」により、家庭学習における繰り返し学習の実施

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査等の結果をふまえた授業改善

① 算数科における授業スタイルの確立

算数科において、課題の解決に至る方法について、数や式、数直線などを使って説明させる活動を大切に、課題解決の場面では一斉に指導している。その後、適用問題を行う場合には、グループ分けし、個別の支援を進めてきた。

【神辺小学校の授業スタイル】

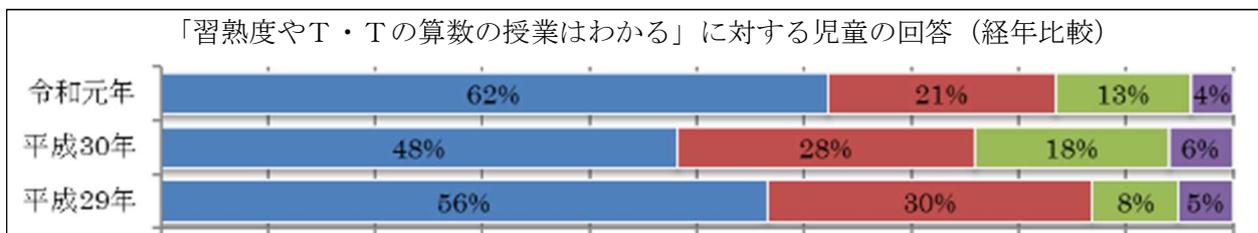
めあて → 課題の提示 → 自己解決 → 集団解決 → 適用問題 → 振り返り
(プログラミング的思考) (記述 書く活動の日常化)

授業スタイル確立のポイント

- ・「めあて」と「振り返り」の関連性。学習内容・解決の道筋（手順）の明確な理解。
- ・必ず適用問題を実施し、指導と評価の一体化。
- ・「振り返る活動」で、児童が書く時間を十分に確保。

(成果)

○児童の算数少人数指導にかかる意識調査における肯定的回答の増加



○授業スタイルを確立する取組を進めてきたことにより、教職員アンケート「めあて」と「振り返り」の正対についての意識が100%になった。

○適用問題を行うことで、児童一人ひとりの学習内容の理解の状況を定量的に把握することができ、指導と評価の一体化が進んだ。

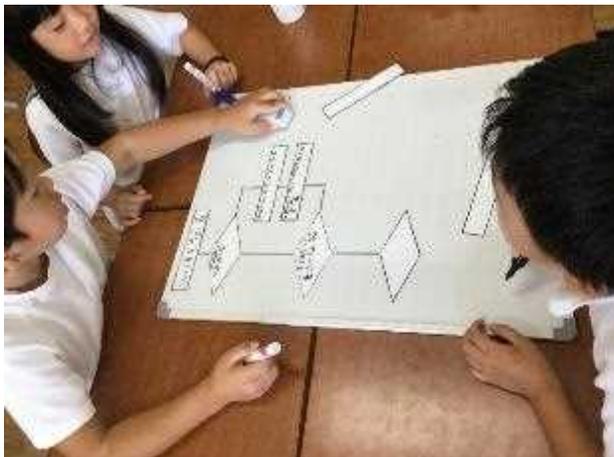
② 本校が取り組むプログラミング的思考を取り入れた授業づくり（算数科）

プログラミング的思考を取り入れた授業を行い、思考の手順が見える化することを大切にしている。カードやフローチャートを並べる活動は、学習が苦手な児童にとって視覚支援にもな

り、学習意欲の持続につながっている。特に、本年度は、低学年の「数と計算」領域の学習においてプログラミング的思考を取り入れた算数指導に効果が見られた。

プログラミング的思考を取り入れた授業について、児童は好意的にとらえている。

- ・プログラミング的思考を取り入れた授業が楽しい 肯定的な回答 88% (H30) →98% (R1)
- ・プログラミング的思考を取り入れた授業がよくわかる 肯定的な回答 87% (H30) →93% (R1)



＜2年生児童がひき算の筆算の仕方をフローチャートを使ってグループ解決、全体解決しているところ＞

(2) つまずきのある児童の状況把握と、その児童に応じた基礎的・基本的な知識及び技能の定着
神辺小学校では、各学年で今まで学んだ内容の確認テストを行い、子どもたちのつまずきの状況を「算数カルテ」を活用して把握している。そして、つまずきのある単元について、学年をさかのぼって再授業・補充的な学習を学校全体で行い、学習内容の定着を図っている。家庭学習においても、週末に、児童のつまずきに応じたプリント（4～5枚）を宿題とし、子どもたちの学習内容の確かな理解・定着につなげている。

(成果)

- 「算数カルテ」の作成により、児童が苦手としている単元の把握と、児童の状況に応じた補充的な学習が可能になった。
- 補充的な学習の指導方法や指導内容が焦点化されたため、教師の教材研究等にかかる時間の短縮につながった。(習熟確認テスト→算数カルテ→補充のための再授業→プリントで補充)
- 学習ボランティアの協力により、児童一人ひとりの状況に応じた個別支援がより進んだ。
- 第5学年みえスタディ・チェックにおける正答率、特に記述式問題の正答率が向上した。
- 全国学力・学習状況調査の結果、算数科において、平成29年度から毎年1ポイント程度正答率が上昇している。
- 1月実施のみえスタディ・チェック算数において県の平均正答率を上回ることができた。第5学年児童の学力の向上を定量的に確認することができた。国語においても、県の平均正答率を上回った。

(3) 家庭と連携した家庭学習の取組

(成果)

- 家庭と連携し、確認テスト・補充的な学習・週末の家庭学習の流れを確立するなかで、平日1時間以上学習する児童が増え、学習習慣の確立及び学習内容（特に算数科における基礎・

基本)の定着も図られつつある。

○県内一斉で取り組んでいる「生活習慣・読書習慣チェックシート」により、児童が生活の中に「学習」の時間を位置づけるよう促している。宿題だけでなく、読書も含めて机に向かう児童が増えている。

- ・図書館貸出し冊数が、平成30年度は10865冊だったが、令和元年度は12308冊になった。
- ・11月をのぞいて、1日あたり、一人あたりの貸出し冊数が増加した。
- ・1年生においては、週末読書の取組が定着しつつある。

4. 今後の課題

(1) 算数科におけるつまずきのある児童への手立て

「計算の仕方」についての学習では、それまでに学んだ既習事項を活用して本時の課題を解決する必要がある。小数のかけ算の補充的な学習を行っても、その前段階の整数同士のかけ算の筆算でつまずいている児童への指導は大変難しい。そのため、高学年の補充的な学習では、ボランティアと教師の4人程度で個別支援を行っている。児童一人ひとりのつまずきをそのままにしないためにも、確実な各学年での指導と、補充的な学習・家庭学習で繰り返し学ぶことで、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図る。

(2) 教科の目的を達成するための「プログラミング的思考」であることの意識化

本年度からプログラミング的思考を取り入れた授業づくりについて研修を行い、文部科学省の「プログラミング教育の手引」なども参考にして、授業実践を行ってきた。どのような場面でこの手法が有効か、おおよそつかむことができたと考えている。今後は、継続して「プログラミング教育」が実施できるよう、年間指導計画を整備し、継続して実施・改善できるようにしていく。

プログラミング教育は教科の目的を達成するための手段であることの意識が十分でないところがある。計算の手順を学習するも、フローチャートを作ることに意識が向けられ、本時の目的が十分に達成されないこともあった。フローチャートを使って、自分の考えを整理し、集団で話し合い、解決まで導くことで、教科の目的を達成していくという意識化が求められる。

(3) 家庭学習の充実に向けて

「家庭学習の手引き」や「学校だより」をとおして家庭学習について啓発しているが、家庭の状況により、家庭学習の時間が十分でなかったり、宿題に取り組めなかったりする実態がある。このような児童は、学習内容の理解・定着状況も十分でなく、学習意欲も低い。教育活動アンケートの結果については、改善が見られるが、未だ30%近くの児童が家庭学習が十分にできない状況がある。今年度初めのPTA総会において、このような実態の改善に向けて、直接保護者へ要請した。今後も、児童の学習状況等について繰り返し伝え、保護者の意識の変化を促す取組が必要である。

また、「生活習慣・読書習慣チェックシート」の取組により、家庭における時間の使い方の改善を促しているが、1日のうちの数時間をゲーム、SNS、テレビに費やしている児童がいる。今後も、生活習慣の確立と家庭学習の充実に取り組んでいく。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

協力校名	三重県亀山市立亀山中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 平成30年度全国学力・学習状況調査結果（本校の特徴的な傾向 ○強み △弱み）

[国語]

○教科の平均正答率は、全国の平均正答率を下回っているが、「読むこと」や「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の問題では、全国の平均正答率を上回っている問題もある。

○具体的には、芥川龍之介の少年を取り上げた問題で、「場面の展開や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解しているかどうか」の正答率が高い。

△「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことができるかどうか」の問題の正答率が低くなっている。具体的には、「彼は（1 水気 2 せき 3 紙 4 くう）を切ったように話し始めた。」という問題の正答率が低い。

[数学]

○教科の平均正答率は、全国の平均正答率を下回っているが、改善傾向にある。

○「空間図形」では、「四角錐の体積は、それと底面が合同で高さが等しい四角柱の体積の1/3であることを理解しているか」の問題の正答率が高い。

△「数と式」「図形」「関数」「資料の活用」のすべての領域で活用力を育む取組が必要。

△「空間図形」に関して「半円を、その直径を軸として回転させると球が構成されること」「見取図・投影図から空間図形を読み取ること」の問題に課題がある。

[理科]

○教科の平均正答率は、全国の平均正答率を下回っているが、「化学的領域」「地震に関する問題」では全国の平均正答率を上回っている問題もある。

○「水溶液の濃度を求め比較する」や「緊急地震速報を科学的に探究する」の問題の正答率が高い。

△生物的領域「刺激と反応を科学的に探究する」の問題に正答率の低さが見られる。具体的には、反応の経路を問う問題で「目 → 神経 → 脳・脊髄 → 運動神経 → 筋肉」という問題に課題が見られた。

(2) 平成30年度みえスタディ・チェック（第2学年）結果

平成30年度みえスタディ・チェックでは、各教科（国語・数学）の県の平均正答率との差を

4月実施と1月実施とで比べると、マイナスに広がりが見られたことから、学校において分析・対策検討会議を持ち、基礎的・基本的な知識及び技能を定着させる短時間学習等の取組と無解答を減少させる取組を進めることとした。

2. 協力校としての取組状況

(1) 授業改善

昨年度の研修のキーワードであった「ユニバーサルデザイン」の視点をベースとして、今年度は研修テーマを「だれもが“できる”“わかる”を実感できる授業づくり～主体的・対話的で深い学びの実現～」とした。このテーマのもとに教師主導の説明型授業から、生徒主体の課題解決型（学び合い）授業への転換を目指して取組を行った。

第2学年数学科においては、習熟度別少人数指導を行った。2コース（基礎・標準）からの選択制で、生徒の学習状況に合わせ、單元ごとに再選択を可能とした。授業外となるが、昨年後半から月に一度ずつ「人権の日」「道徳の日」と名付けた短時間学習を帰りの会の中で実施してきた。一つのテーマで学び合い、話し合いの活動を行ってきたが、この活動が話し合いの実践力を高めることにもつながっている。

(2) 基礎学力の定着を目指した補充的な学習の取組

毎週水曜日は、部活動をはじめとする放課後の活動を行わず、職員の会議や研修がない日において自主的な学習時間「学びたいむ」と、基礎学力の定着が十分でない生徒を対象とした補充的な学習時間「亀中スタ Day」を行った。指導は全職員が交代で担当することに加え、学習ボランティアを活用した。また、朝の会の前は、第1・2学年は読書、第3学年は短時間学習を行っていたが、今年度より毎週水曜日は学習時間として数学の基礎プリントに取り組み、第2・3学年では、学び合いの時間も設けることとした。

(3) 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組

家庭での自主学習の定着を図るため「スタ Day ノート」（本校独自の家庭学習ノート）の取組を進めている。生徒の提出率は90%を超え、全員が提出できている学級も多い。また、PTAと連携して「ケータイ預ける Day」の取組を行ってきた。毎週水曜日をケータイ、スマホ、ゲーム機などを使わない日として設定し、生活習慣の改善を呼びかけている。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 授業改善

生徒アンケートにおける「授業への理解度」は88.5%で、当初の目標値80%を超えた。教職員においても87%が「理解している」と回答しており、前年度からの授業改善の取組に一定の手ごたえを感じている。特に習熟度別少人数指導に取り組んでいる第2学年数学科においては、みえスタディ・チェックの県の平均正答率との差において6.3ポイントの改善が図られた。

(2) 基礎学力の定着を目指した補充的な学習

12月末時点で補充的な学習時間「亀中スタ Day」は11回実施して延べ242人、自主学習時間「学びたいむ」は26回実施して延べ592人が参加している。この活動において昨年度から協力をしてもらっている学習支援ボランティアに加え、本年度は学生ボランティアの協力も得られるようになり、より生徒一人ひとりの学習の状況に応じたきめ細かな指導につながられた。

また、今年度は数学の基礎学力の定着を図るため、毎週水曜日に朝学習を開始した。短時間学習ではあるが、第2・3学年では4人組での学び合いも行っている。この活動の教材の準備や採点も学習支援ボランティアが担当している。



<学びたいむの様子>



(3) 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組

「スタ Day ノート」は活用して3年目となり、職員、生徒ともにその取組が浸透してきた。

「家庭で毎日勉強していますか」というアンケートに対しても年々向上が見られ、今年度は71%となった。(全国学力・学習状況調査 質問紙調査「家で自分で計画を立てて勉強していますか。」は、本校52.6%、全国50.4%)

生徒の生活習慣の改善につなげる取組についても昨年度の反省を生かして、県の「生活習慣・読書習慣チェックシート」を活用し、小学校とも連携して取り組むようになった。

4. 今後の課題

授業改善として生徒主体の学び合いを取り入れた授業に取り組んでいるとはいえ、毎時間学び合いをすることを標準とした授業デザインが組み立てられているとは言い難い。子どもたちの話し合い活動も、依然としてグループ内での意見発表や、意見の言い合いにとどまり、他者の意見に学び、自分の考えを深める学び合いとなっていない。今後、「学び合い」についての研修を深めるとともに、よりよい学び合いの姿へ向け学習スタイル、授業スタイルの標準化を目指していきたい。

また、本校は日本語初期適応のための日本語教室を有し、市内の拠点校となっている。日本語に不安のある生徒が、学級の中での学び合いをとおして「居場所」を見つけ、「絆」が生まれる。日本語教室の生徒に限らず、すべての生徒において学び合いが仲間づくりであり、生徒の「居場所づくり」「絆づくり」を大切にした学級経営を全学級で進めていきたいと考えている。またそれらを基盤として「確かな学力」の向上へとつなげていきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える
学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

協力校名	三重県亀山市立中部中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校の平成30年度全国学力・学習状況調査の結果は、全教科で全国の平均正答率には達していなかった。各教科の設問ごとの分析結果から、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が十分ではない状況が明らかになってきた。このことは、各教科で学んだことが他教科や日常生活で十分な活用につながっていないこと、また、家庭における学習時間が少ないことが主な理由として考えられた。

このような状況をふまえ、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が全ての生徒に図られるよう、授業・補足的な学習のあり方や家庭学習の改善の取組に重点を置く必要があると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 「MATH CHALLENGE TIME」（授業での短時間の繰り返し学習）の取組

全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェック等の結果をふまえて、授業改善を図るとともに、生徒一人ひとりの学習状況把握、数学の基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図るために実施した。

昨年度の反省より、つまずきの多い学習内容が小学校の内容であったことから、今年度は2年生だけでなく1年生でも「MATH CHALLENGE TIME」を実施し、小学校の内容から復習することで、つまずきをなくしていこうと考えた。

取組方法としては、2年生の習熟度別少人数指導の基礎・標準コースでは、前時の授業の最後に問題を配付して家庭学習を行い、授業で答え合わせと解説を行った。2年生の発展コースと1年生では、計算速度の向上を図るため、授業のはじめの5分間で問題を解き、その後に答え合わせと解説を行った。昨年度は、朝の会前の時間を利用しての取組であったが、本年度は数学の授業中に行うことで、数学科の担当教員が生徒の解答状況を直接確認し、生徒がどのような点でつまずいているのかをより詳しく把握することとした。また、授業や放課後のSL（セルフラーニング）タイム等の時間を利用して、つまずきのある生徒には繰り返し指導を行った。

(2) 授業改善

① 「振り返る活動」における書く活動を重視した授業づくり

毎回の授業において、見通しをもって学習課題に取り組み、学んだことを振り返る授業の徹

底を行った。特に「振り返る活動」では、授業の最後に5分間程度の「振り返り」の時間を確保し、本時のめあてに対応させること、何を学んだか、どのように考えが変わったかについて書くことに留意した。

② 数学科における習熟度別少人数指導の実践

今年度、数学科において第1学年と第2学年で習熟度別少人数指導を行った。特に第2学年においては、三重県教育委員会の「わかる授業」確かな実践事業を受託し、個に応じた指導を行うことができた。

第1学年では、2学期後半から生徒に希望をとり、基礎・発展の2コース編成とした。2年生では、2学級を3コース（基礎・標準・発展）とした。コース分けは、生徒の希望、学力テスト、成績等をもとに決定し、学期ごとにコースの再編成を行った。

授業終了後には、できる限り担当教員が集まり、今回の授業や生徒の様子、授業の進め方などを話し合うことで、共通理解を図るようにしてきた。

(3) 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組

一昨年度から生徒会が中心となり「家庭学習の充実をはかるために、学習時間を確保する。」「学習習慣を身につけ、学力向上をめざす。」という目標のもと、「ノースマホデー」に取り組んできた。「スマホ、PC、ゲーム等は21時以降使用しない。」の取組を、教師の支援のもとPTAの協力を得ながら行い、生活習慣の安定と家庭学習の時間の確保を目指して進めてきた。この取組期間を定期テストの学習期間と合わせ、テスト学習計画表に守れたかどうかをチェックする欄をつくることで、各担任が各生徒の家庭での生活状況の把握をした。また、生徒による家庭学習の取組の呼びかけやポスターの作成・掲示を行うことで、自主的に学習に取り組む学校風土の醸成に努めた。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 「MATH CHALLENGE TIME」の取組

「MATH CHALLENGE TIME」の取組を実施してきたことで、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に大きな改善が見られた。本年度より全国学力・学習状況調査がA B一体となったため、直接的な比較が難しいが、数学における平成30年度のA問題とB問題の結果合計と、平成31年度の結果を単純に2倍したものとを比較すると、結果が14ポイント改善した。全国平均との差においても7.4ポイントの改善が見られた。本年度のみエスタディ・チェックの第1回と第2回の結果を比較し、分析した結果は以下のとおりである。

○数と式領域では、基礎・基本の問題の正答率が県平均と比べて差が縮まった。

・四則計算 6.1ポイント改善 ・割合 3.3ポイント改善

○図形領域では、三角形の合同を証明する記述問題で正答率の改善が見られたとともに無解答率も減少し、問題に対して自分の考えを説明する力がついた。一方で、扇形に関する問題では県の平均正答率と10.5ポイントの差がついており課題が残るものであった。

・三角形の合同の証明 21.6ポイント改善

○関数領域では、変域を示す問題の正答率が県平均と比べて13.6%も低く、関数への苦手意識等が浮き彫りとなった。

○資料の活用領域では、正答率の県平均との差に改善が見られた。

- ・適切な代表値を選ぶ 7.8 ポイント改善
- ・相対度数を求める式 12.8 ポイント改善
- ・度数分布多角形の特徴を基にした理由の説明 12.1 ポイント改善

(2) 授業改善

① 「振り返る活動」における書く活動を重視した授業づくり

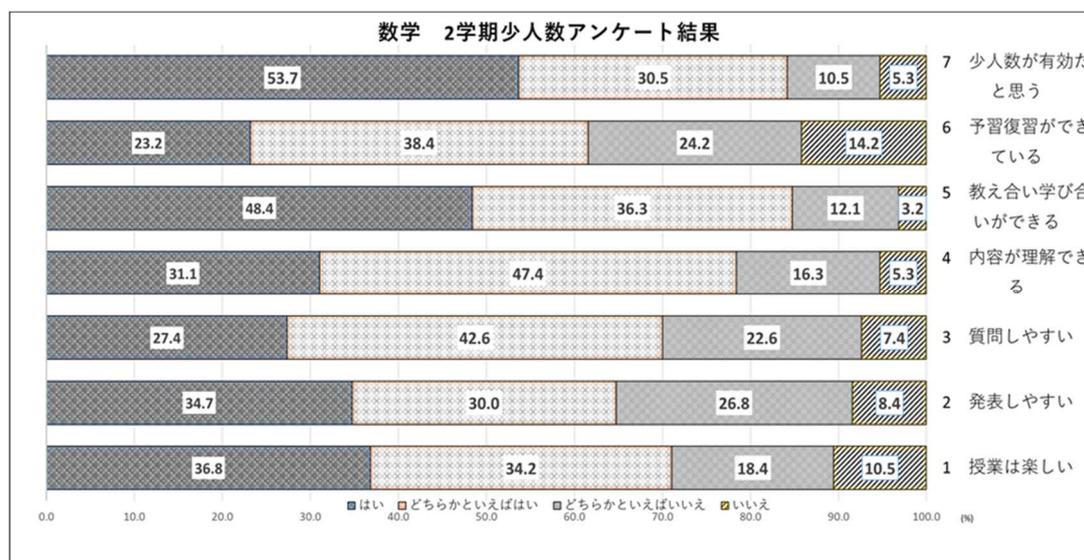
授業の最初に「めあて」を提示することで、生徒が今回の授業でどのような内容を学ばなければならないかを意識しながら学習を行い、授業の最後に「めあて」に対してこの授業で何を学んだのかを「振り返り」として書くことで、学んだことの整理、学習内容の理解・定着につながった。授業で生徒に何を学ばせたいのかを教師が意識して「振り返り」の内容を想定し、そのための授業の流れの組み立てや教材を工夫するとともに、よりの確な「めあて」の設定ができるよう、今後も研修を行っていく必要がある。

② 数学科における生徒の習熟の程度に対応した授業実践

習熟度別少人数指導を行ったことで、生徒の数学の授業に対する意識に高まりが見られた。各コースで学習したことを、授業後に戻った自分のクラスで交流する生徒の姿も見られた。また、習熟の状況が近い集団で学習することで、生徒のつまづきをとらえやすく、教師からのサポートをきめ細かに行うことができる点が最大のメリットである。各コースに応じた指導過程の時間配分を工夫したことにより、無理なく生徒を支援することができた。

また、第2学年の生徒全員に対して2学期末に行ったアンケートでは、「習熟度別授業が有効である」という質問に対して肯定的な回答が84.2%と高い割合であった。また、「教え合い学び合いができる」という質問に対しても84.7%の肯定的な回答が見られた。その他の質問でも肯定的な意見が60%以上あることから、習熟度別少人数指導の有用性が認められた。

アンケートの結果は次のとおりである。



「数学の授業は楽しい」と回答する生徒が71.0%いる一方、4月に実施した「みえスタディ・チェック」では正答率が30%に満たない問題が7問もあった。ほとんどが長文を読み解く問題や、自分の言葉で論理的に説明する問題であった。習熟度別少人数指導で生徒の数学への関心が向上するなか、問題が意図している要点の読み取りと、自らの考えを論理的に示すための指導を、習熟度に合わせて行っていく必要性が感じられた。

(3) 生活習慣・学習習慣の改善に向けた取組

「ノースマホデー」の取組や生徒会からの家庭学習の呼びかけを行ってきたことで、家庭学習への取組の意識は高まってきている。生徒に対する学校評価アンケートの結果を見ると、「家庭で毎日勉強しているか」の質問項目に対する肯定的回答が、(H29)55.5%→(H30)59.2%→(R1)63.4%と改善してきている。「授業への集中」「学力の定着」に関する質問項目でも、同様に肯定的回答の割合が改善してきており、学習に取り組む学校風土の醸成は進んでいると見られる。これからも生徒会を中心とした活動を継続的に行うとともに、さらなる日常的な生活習慣・学習習慣の定着と、家庭学習の質の向上を目指していきたい。

4. 今後の課題

本事業による取組を始めて2年間が経過したが、生徒たちの様子には明らかな変化が見られた。数学科として「MATH CHALLENGE TIME」の取組や習熟度別少人数指導を行うことで、学習習慣の定着や基礎的・基本的な知識及び技能の定着が図られてきた。一方、新たに「問題(の意図・要点)を読み取る力」と「自分の考えを(適切な言葉で筋道立てて)書き表す力」に課題があることが明らかになってきた。これらの力は、数学科だけでなく全ての教科で共通して必要であり、今後本校において「主体的・対話的で深い学び」を実現していくために欠くことのできない力である。本年度より「新聞学習」に全校で取り組むことをとおして改善のための取組を始めているが、これからも本事業での取組内容や成果を大事にしつつ、「読む力」「書く力」の育成に努めていきたい。